九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

学生の多様化に対応した学生調査に関する研究

杉原, 亨

https://doi.org/10.15017/4060240

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（ライブラリーサイエンス）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：杉原　亨

論 文 名　：学生の多様化に対応した学生調査に関する研究

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

教育制度と組織の評価と改善には、教育課程と学生の実態把握が必須であり、多くの教育組織や教育行政機関による学生調査が実施されている。学生調査は低コストで実施でき、他大学との比較が可能であるなど、有効性が認識されている。従来の学生調査は、主に 4 年制大学の一般的な学生を対象とし、学習行動が主たる分析項目であった。一方、1990 年代以降、大学進学率が急激に上昇し、2010 年には 50%を上回り、学士課程教育の在り方について再検討が必要となった。高等教育の発展段階を表す Trow モデルによれば、進学率が 15%以下で選抜された学生のみが入学していたエリート段階と異なり、進学率が 50%を越え大半の学生が大学に進学する日本は、すでにユニバーサル段階に突入している。従って、動機や意欲及び卒業後のキャリアについて、現代の学生が持つ多様な考え方は、従来の学生調査では捉えられない。このような背景のもとで、学生の多様化に対応した学生調査が求められている。

本研究では、我が国において問題が指摘されている体育会学生と、首都への一極集中で見過ごされてきた地方短期大学学生を対象として、多様性分析のための重要項目を明らかにした。体育会学生については、従来から熱心な部活動による大学での学習の悪影響が指摘され、大学スポーツに関する全国組織が発足し、指導体制のあり方の検討が始まっている。また、短期大学生については、全体の在学者数は減少傾向であるものの、地方短期大学は地域からの進学率が 4 年制大学と比較して高く、就職についても地元志向が強いので、地域から人材育成について多くの期待が寄せられている。

学生自身が高等教育に対して学問分野の体系的習得を目的としている前提に立っていては、これらの多様化した学生の考え方を捉えられない。本研究では、卒業後の職業についての意識という観点が、これらの多様な学生を捉える項目となるのではないかと考えた。そこで、学生調査の新たな項目として将来の視点での学習の捉え方やキャリアについての考え方を表す質問項目リストを作成し、各項目に対して、統計や機械学習による分析により定量的な評価値を求めることで重要な項目を明らかにした。

短期大学生については、学生調査における理論的支柱である Astin の I-E-O モデルにおいて、大学における教育環境が成果を決定する要因とみなされている。これを踏まえて、成果を上げた学生とそうでない学生を区分する特性として、学生本人の意識による要因と環境による要因の 2 つを考えた。

まず学生本人の意識においては、先行研究では否定的にしか捉えられていなかった学習に対する受動的意識に着目し、単に否定するのではなく、学生がそう思う理由に、短期大学生における多様性の特徴が現れていると考えた。そこで、従来の学生調査にはなかった授業に対する消費者意識という観点で分析を行った。具体的には、118 名を対象に授業に対する消費者意識を費用、品質、安易性、即効性、将来性の 5 種類の要求として質問項目を作成し 5 件法で質問紙調査を行った。その結果、成績上位者と下位者について統計的に有意差はなかった。ところが、資格取得した学生とそ

うでない学生では、資格取得した学生のほうが消費者意識の費用に関して要求は強く統計的に有意差があった。

次に環境による要因としては、コミュニケーションという観点で課題があると考えた。それを捉えるため、121 名を対象に将来の進路に関しての教員への相談頻度などについて分析した。具体的には、入学後の満足度、在学時の学習効用、卒業後の相談や継続学習や行事参加に関する 5 つの大項目から構成される 21 の小項目の質問を作成し分析した。その結果、相談した学生のほうが入学後の満足度や在学時の学習効用及び卒業後の相談頻度は高く統計的に有意差があった。なお、近年、教育経済学で初等教育を対象とした投資効果などの経済的観点の研究が注目されている。本研究は、対象を高等教育として、観点を消費者意識とする研究としても位置づけられる。

体育会学生については、5 つの私立大学の学生で体育会所属学生 100 名、それ以外の 141 名、合計 241 名の学生に対する質問紙調査を行い、体育会学生を正例として機械学習を適用し、体育会学生とそれ以外の学生の識別モデルを構築した。その結果、312 種類の因子の中で部活動の時間が長いこと以外に、経済的に豊かな生活が仕事の目的であり、学習は興味関心があることに限定的などの 16 個という少数の属性が体育会学生と特徴だとわかった。実際、この 16 個の特徴で、体育会学生とそれ以外の学生を高い識別性能（F 値 0.89、正解率 0.90）で識別できた。